



交通安全は歌とダンスに乗せて

～在住ブラジル人による交通安全教育

(財)自治体国際化協会多文化共生部多文化共生課
主査 塚本 敦 (秋田県派遣)

1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正により、多くのブラジル人が労働者として日本にやってくるようになりました。それから20年。南米系住民が多数居住する都市は外国人集住都市と呼ばれ、さまざまな課題を抱えながら共生の道を探ってきました。そのひとつに交通安全があります。これまでも日本側からの交通安全指導は行われてきましたが、在住ブラジル人が初めて主体的に実施する交通安全教育のイベントが静岡県掛川市で開催されました。

このままではいけない

愛知県豊田市で通訳業を営む日系ブラジル人2世、おおちきよし黄地潔さんは来日してから17年間、通訳をしながら交通加害者、あるいは被害者となったブラジル人を数多く見てきました。静岡県警交通企画課によれば、今年1月から9月まで外国人が原因となった人身事故は486件発生し、そのうちブラジル人の事故が248件と過半数を占めています。

「ブラジル人の交通事故が多すぎる。在住ブラジル人に交通ルールを教えて交通マナーを高めたい。またブラジル人が事故を起こしたのかと言われたくない」。そう思った黄地さんは「PROIET(プロイエット・国際交通教育事業)」を立ち上げます。「子どもたちに正しい交通ルールを覚えてほしい。でもどう教えるのか？まずは子どもたちに興味を持ってもらいたい。できることなら楽しく教えたい」。そこで考えました。ブラジル人は歌やダンスが大好き。「子どもたちに交通ルールの替え歌を作らせてはどうか？」黄地さんは愛知県や静岡県をはじめとして全国のブラジル人学校を回

り、交通安全を題材にした替え歌や寸劇を、子どもたちが自ら考えて作ることを提案しました。

交通安全教育を楽しく

この試みは成功しました。ブラジル人学校では交通安全を題材に、子どもたちが自分たちで替え歌と寸劇を作ることに取り組み始めました。教室には明るい歌声が響きます。現在では、全国のブラジル人学校約80校で替え歌と寸劇づくりが行わ



交通安全を題材にした寸劇を披露するブラジルの子もたち



「良き市民として交通ルールを守りましょう」と誓いの言葉

れています。この取り組みは広がりを見せ、2010年10月10日、静岡県掛川市の掛川市生涯学習センターで交通安全啓発イベントが開催されました。

当日は静岡、愛知両県から8校のブラジル人学校が参加。かわるがわるステージに立ち、交通安全をテーマにした替え歌やダンス、寸劇を披露しました。「車で仕事に出かけた男性が、綺麗な女性に見とれてスクールゾーンの標識を見落としてしまいました。交通違反で罰金を取られてしまい、会社にも遅れてしまいました」。運転する人はもちろん、歩行者側もつねに周囲に注意を払いましょうという教訓を楽しく歌っています。ステージには手作りの自動車や警察官に扮した子どもたちが次々に登場。観客席の保護者や友だちも楽しそうに声援を送りながら交通ルールを学んでいました。

この日駆け付けた在浜松ブラジル総領事館のホベルト・V.マスカレンニャ副総領事は「子どものうちに交通ルールを覚えることが必要。こういったイベントは今後とも続けられるべき」と、この試みを高く評価していました。

広がる交通安全教育の輪

この日は掛川警察署から交通安全指導員も参加。壇上から「正しい横断のしかた」を指導しました。指導員はポルトガル語と日本語で併記された横断幕を示しながら「できるだけ横断歩道を渡りましょう。一度しっかりと止まって、手をあげましょう。車が来なかったり、止まってくれたりしたことを確かめてから渡りましょう」とわかりやすく説明しました。掛川署の竹内均交通課長は「言葉の壁もあってブラジルの子どもたちには交通ルールが浸透しきれていない。このまま大きくなって日本でハンドルを握ることもあるだろう。こういった場を通して日本の交通ルールをしっかりと学んでほしい」と語っていました。また、静岡県警の外国人交通安全教育指導員が正しい自転車の乗り方や信号の守り方をポルトガル語で指導しました。イベントの最後はサンバカーニバル。リズムに合わせてみんなが踊りだします。

こうして、歌とダンスがいっぱいの初の試みは、



掛川署交通安全指導員による横断のしかたの指導

成功のうちに終わりました。

交通安全教育事業のこれから

黄地さんは、このイベントを範囲を広げながら続けていきたいと考えています。また今回はブラジル人学校を対象にしたものでしたが、日本の学校に通っているブラジル人の子どもにも参加してほしいと語っています。

しかし課題もあります。在住ブラジル人による手作りのイベントであるため、経費の問題が付きまといまます。開催を継続するためにはスポンサーの確保が必要です。また、交通費や人件費の問題のため、19校のブラジル人学校に声をかけたものの参加は8校にとどまりました。不景気は工場労働者が多いブラジル人社会に悪影響を与え、それがブラジル人学校にも及んでいるのです。

奇しくもこの日の会場となった掛川市は、1908年、第1回移民船「笠戸丸」で通訳としてブラジル開拓のため渡航、移民の父と称せられた平野運平氏の出身地であり、会場の掛川市生涯学習センターにはその胸像が建てられています。

ブラジル移民から100年が経ち、日系ブラジル人2世、3世が日本で生活する時代になりました。交通安全教育はこれまでブラジル人側が受け身になりがちでしたが、ブラジル人が主体となって子どもの頃から交通安全意識を高めようとするこのイベントは、多文化共生のための新たな試みとして注目されます。